2020年7月12日 久宝教会 部落解放祈りの日（聖霊降臨節第7主日）礼拝

メッセージ「光は一隅(いちぐう)より、力は一人(ひとり)より」　　牛田 匡 牧師

聖書　使徒言行録　9章36節－43節

「光は一隅より、力は一人より」。この言葉は、私の好きな詩人である坂村真民さんの言葉です。この言葉を聞いて、皆さんはどのような風景を思い描かれたでしょうか。私は夜明け時の風景を思いました。仏教詩人として有名な坂村さんは、毎日午前0時に起きて、日が昇る夜明け時に散歩をしていたそうです。真っ暗な所に、一筋の光が差し込み、やがて少しずつその光が多くなって、辺り一面を照らして行く。それまで見えなかったものが明るく照らし出されて行く。世界に朝をもたらす光も、初めは山の向こうの一隅、この世界の片隅から差してくる小さな光に過ぎません。同じようにやがては世の中の様々な物を動かして行く大きな力も、最初はたった一人から始まっている。そしてその一人が二人になり、二人が三人になり、やがて社会を動かして行く大きなうねり、運動になって行く……。私たちの社会の歴史を振返ると、しばしばそのような人々の働きを目にすることがあります。

今日は「部落解放祈りの日」です。全国各地で起こった部落解放運動もまた、初めは一人一人の小さな光、小さな立ち上がりの一歩から始まっていたのだと思います。アメリカで起こっている人種差別への抗議運動もそうでしょう。小さな光はすぐに遮られて再び隠されてしまうかもしれません。一人の力は弱くて、何も動かすことができず、また周りの人たちから、見向きもされないかもしれません。しかし、全てはそこから始まっています。むしろ、そこからしか始まりません。私たちが週ごとに耳を傾けている聖書の物語、イエス様の歩みもまた、そのように暗闇の中に起こった一つの小さな光に他なりませんでした。

そしてまた、先程読んだ今日の聖書の箇所「ペトロがタビタを生き返らせた」物語もまた、そのような小さな一人の物語でした。舞台は地中海に面したヤッファという町でした。この町は古代から地中海貿易で栄えた都市で、イエス様の死と復活の後、ペトロたちが活動した紀元 1 世紀の頃はローマ帝国の影響を強く受けており、ユダヤ人だけでなく、様々な人々が行きかっていた都市でした。そこにタビタという一人の女性がいました。ヘブライ語で「タビタ」、ギリシャ語に訳すと「ドルカス」とわざわざ書いてある程なので、その町には様々な文化の人々がいたということが、想像されます。36 節によると、このタビタは「女の弟子だった」とありますが、この「女の弟子」という言葉は、新約聖書の中でこの箇所にしか出て来ません。

福音書を開くと、イエス様と行動を共にした人々の中には、女性たちもたくさんいたということが記されていますが、しかし「弟子たち」と記される時、それは全て男性形で書かれています。歴史的には、最初期のキリスト教共同体には、マグダラのマリアを始めとした何人もの女性のリーダーたちがいましたが、その

ような人々の思い出や記憶は、何十年も後に男性の執筆者や編集者によって文字に書き留められて行く中で、失われていったと考えられています。ですから、ここでタビタがわざわざ「女の弟子」と記されているのは、彼女がヤッファにおける最初期のキリスト教共同体にとって代表的な人物の一人であったということでしょう。

彼女の名前はこのわずか数節にしか出て来ませんので、彼女がどのような人物だったのか、その詳細は分かりませんが、彼女は「数々の善い行いや施しをしていた人」でした。その周りには男性も女性も多くの人々が、彼女を慕って集まっていたようです。とりわけ 39 節にあるように「やもめたち」、夫を先に亡くして寡婦となった女性たちが、彼女の周りにはいて、彼女はそのような女性たちと共に共同生活をしていたとも考えられています。当時の社会の中で、「孤児、寡婦、寄留者（難民）」というのは、社会の中で最も低くされ、差別されていた人たち、権利の保証もなく、ともすると死の危険にさらされる人たちでした。そのために聖書には何度も、「それらの小さくされている人たちを大切にしなさい」という言葉が記されていますが、それは実際にはそれらの人々が全く大切にされない現実があった、ということの裏返しでした。女性は一人の人格としてではなく、夫の所有物、財産の一つであり、子どもを産み育てる目的のための存在と見なされていましたから、先に夫を亡くしたやもめたちは、社会的な地位も財産も失い、すぐさま生活に困窮したことと思われます。タビタは、そのようなやもめたちと一緒に数々の下着や上着を作っていました。現代の言葉で言うと、洋裁やミシンの技術を教えて、手に職をつけて、暮らしていけるように職業訓練していったということでしょう。彼女たちにとってタビタは命の恩人とも言える、掛け替えのない存在だったのだと思います。

タビタが病気のために亡くなると、人々はその遺体を洗い清めて、安置しました。そして仲間の中から二人の人を、ヤッファから 17 キロほど離れたリダにいたペトロの所に派遣して、「どうか、私たちのところへ来て下さい」と言って、ペトロを呼んで来ました。往復で丸一日か二日かかったことと思いますが、それだけ真剣だったのでしょう。ペトロは到着すると、ひざまずいて祈り、そしてタビタは再び立ち上がりました。このような死者の生き返りの奇跡物語は、ヘブライ語聖書にも出て来ますし（列王上 17：8－24、列王下 4：32－35）、また福音書においてもイエス様も行っています（マルコ 5：40、ルカ 8：54）。「タビタ、起きなさい」と声を掛けて、目を覚ましたというのは、一体どういうことなのか。元々死んでいなかったのか、単に寝ていただけなのか、など、具体的に考えると、分からないことだらけですが、「大勢の人々を部屋から出し、その人と向き合い、神に祈り、立ち上がらせる」という一連の流れは、古代の語り部伝承におけるお決まりの型（パターン）でした。ですので、ここで大切なのは、どのようにしてタビタが蘇生したのか、ではなく、最も小さくされている人々のところに、社会の底辺で悲しんでいる人々のところに、神様の力が紛れもなく働かれる。そして、

悲しみに打ちひしがれていた人々は、再び立ち上がることが出来たということなのだと思います。

都市には、多くの人とモノとカネが集まります。そして華やかな生活がある一方では、格差があり、貧困があります。社会の分業が進むと、職業的な差別も生まれます。43 節にはペトロは「皮なめし職人」シモンという人の家に滞在したとありますが、この「皮なめし」という職業もまた、日本における部落差別と同様に、被差別の職業でした。恐らく、動物の屠殺や、血や脂に関わることから穢れていると考えられ、避けられていたのだろうと思います。人々の社会生活において不可欠な働きであるにも拘らず、見たくないものや関わりたくないものは、一部の人々に押し付けて、多くの人々の目には入らないようにする……。そのような差別と排除の論理が、いつの時代でも、どこの世界でも、働いて来ていたのだと思います。

そのような現実の中にあって、神はどこにいるのか。神はどこに、どのように働かれるのか。一見すると、病気もせずに健康で、商売が繁盛して、幸せに暮らせることが、神様から豊かに祝福されていることの証拠のように考えられますが、実はそうではないのではないか。それら地上の富は、いつひっくり返って、失ってしまうかもしれないくらいに、儚いものに過ぎないのではないか。むしろ神様は、差別されている側の、小さく貧しくされ、希望を持てないような暗闇の状態の中に置かれている人々の所に、共におられて、働かれているのではないか……。このタビタとやもめたちの話は、そのことを私たちに教えてくれているように思います。

先週から、全国各地で大雨が続き、九州や岐阜、長野でも大きな被害が出ています。まだ雨は降り止んでおらず、更に被害が拡がる事も心配されますが、家や家族を失った方々は今、深い悲しみの中におられることと思います。そのような中、早速多くの方々が、現地入りして、緊急支援に当たっておられます。とくにコロナの感染者が東京や大阪で再び増えて来ている今は、他県から大勢の人が現地入りして対応するということの前に、避難先への物資の応援などが求められているようです。日に日に現地のニーズは変化して来ているようですが、これまでに培われて来た様々なネットワークを通じて、全国から必要な物資が届けられていると伺いました。一人一人の思いや行動は小さくても、それらは決してゼロではありません。「微力であっても、無力ではない」……。そこに共に神様が働いて下さっていることを信じて、私たちも連なって行きたいと思っています。

「光は一隅より、力は一人より」……。部落差別も、性差別や人種差別も、まだこの社会から無くなっていません。しかし、それらの暗闇を照らす光は、世の片隅、一隅から射して来ます。解放をもたらす力は一人から始まります。私たちは今日もそれぞれの場と業において、弱く小さくされている人たちと共におられる神様に向かって、用いられていきます。